黒い力と白い願い（I）

——W・スタイロンの「ナット・ターナーの告白」——

安　部　大　成

I

1908年12月26日，ジャック・ジョンソン Jack Johnson が世界ヘヴィー級チャンピオン，トミー・バーンズ Tommy Burns を倒して黒人として初めてこの王座についた時，ジャック・ロンドン Jack London (1876—1916) はニューヨークの或る新聞に，この黒人チャンピオンを打倒し，この王座を奪回する白人ボクサーよ，出よ，「ジム・ジェフリスよ，それはお前だけがやれることなのだ！」と書き送って[1]，所謂「白い希望」White Hope なるものの狼煙を上げた。この「白い希望」は優越人種の代表である白い男が劣等人種と彼等が考え込んでいる黒い男に大衆の面前で叩きのめされるのは許し難く且つまた耐え難いと云う白人大衆感情に支え上げられいた。これはこの不敵な黒い巨人，ジャック・ジョンソンがリングの外で白人女を魅惑して，彼のものとし，日常生活を楽しんだことによってさらに被虐的にあふり立てられ白人大衆は気も転倒せんばかりであったらしい。「白人拳斗家達を叩き倒し，白人女達とベッドを共にし……彼等から女を奪って白人達を激怒させた[2]」ジャック・ジョンソンを打倒したいという「白い希望」は「白い願い」でもあり，また「白い屈辱」をも意味した。だから，それは極めて熾烈なものであった。

1910年，白人の名誉と期待を一身に担ってジェイムス・J・ジェフリス

James J. Jeffries がジョンソン打倒の日を迎えた時，11名の白人ボクサー（この中には元チャンピオンのトニー・バーンズも含まれていた），レスラー達が互いに腕を組み合ってリング上にずらりと並び，「白い希望」に熱狂する大観衆に招介された。そして，ジョンソンに対しては白い力の示威を，ジェフリスには精神的支持をふんだんに投げかけて試合は開始される前から白い興奮に満ちあふれていた。だが，ジェフリスも所詮ジョンソンの敵ではなく，玩具同然にあしらわれ，叩きのめされてしまった。白色人種優越主義の旺盛な時代である。憤懣やるかたない白人大衆感情が推測され得よう。

「白い希望」が遂に日の目を見るに至るのは1915年，ハバナでジェッシイ・ウィラード Jessy Willard がタイトルを白人の手に奪回する時であるが，この日まで約八年間，「白い希望」は「白い屈辱」として白人の感情を圧迫していたのである。

ジャック・ジョンソンが王座にあって白人達の感情を圧していた1908年から1915年までの時期は，1880年代から1890年代の間に行われた南部に於ける黒人の市民権剝奪と人種隔離の法制化が現実的に機能を発揮し，人種不平等と人種隔離が南部流の生活として定着していった時期と重なっている。しかも黒人の北部移動が始まる1915年頃までは91％の黒人が南部に住んでいたことを考えると，この時期は黒人にとっては奴隷制以来の，また一つの新しい苦難と苦斗の時期であった。この時期は黒人を白人の支配下に置くために，白人の不正とテロが露骨に，容赦なく，黒人に加えられていた時期である。1890年代には1,111名の黒人がリンチによって殺害され，1900年代には791名，1910年代には563名，1920年代には281名が殺害されている。[3] リンチの数が時代を経て減少して来ているが，これはリンチの効果が上って来た事もあるためで，不正を戒める社会的な力が強まったと一概には云えない。

南部から北部へと黒人が移動し始めると北部にはリンチに代わる人種暴動が発生し，白人暴徒が黒人住居地域を襲撃している。1900年代のそれでは1908年のイリノイ州スプリングフィールド市の三日間に渡る人種暴動が最大

のものである。これは黒人に犯されたと云い張る白人女の一件を新聞が書き立てたのが発火点となって白人暴徒が黒人地域を襲い，州兵の出動を見ている[4]。1910年代のものでは1917年の同州イーストセントルイス市と1919年のシカゴ市の人種暴動が大規模なものである。前者のそれでは39名の黒人，9名の白人が死亡しているが少数派人種である黒人が白人の一方的襲撃に甘んじていたわけではない。繰り返されて止まぬ人種不正と暴力に対して対決する気運は黒人の中に高まっており，これは1919年，クラウド・マッケイ Claude Mckay (1889—1948) が *The Liberater* に寄せた有名な戦斗的な詩，「若し，我々が死なねばならぬなら」*If We Must Die* に表現されている。だが，ルイス・E・ロマックス Louis E. Lomax もいう如く，戦斗的であり得たのは北部黒人達であって「ニューヨークの警察が北部黒人とミシシッピー州の間に立ちはだかっている時，声を大にして白人の悪口をいうのは実に容易[5]」であった。これに比べて，KKK団を活躍させ，最高裁まで事が進むまでにこれを処理させてしまう白人専制の地，南部では黒人が「従順である様に振舞うのが賢明なこと」なのであった。政治的には黒人の様々な権利を剝奪し経済的には黒人を搾取し，人間的には黒人を彼等白人の下に地位づけ，白人優越，黒人劣等主義を生活の形態とした南部に91％の黒人が暮していた時代の一時期に，ジャック・ジョンソンは人種主義に期待される人間像を破壊し続けていたのである。

リチャード・ライト Richard Wright (1908—1960) は彼の自伝小説 *Black Boy* (1945) で恐怖と激怒と屈辱の中に自滅することなく人生への強い希望を秘めて暮した，南部での傷だらけの少年時代を劇的に描いている。この小説は彼が白人の事務員の「お前は北部へ行ったら，白人の女の子と話をするか？[7]」という野喩，猜疑，恐迫の含まれた問いとも罠ともわからぬ質問に窮しながら，「南部を忘れるために南部を去るのではなく，いつか南部を知り，南部の冷酷な行為が自分や南部の若い世代にどんな影響を及ぼしたかが分るようになるために[8]」北部へと旅立つ17才の頃で終るが，1925年頃（16才～17才

頃）の生活に触れたところで，当時の南部で黒人が口にすることをタブーとされた話題を掲げている。便宜上番号を付けてここに列挙すると

①アメリカ白人女性　②ＫＫＫ団　③フランスとそこで黒人兵が公平に待遇されたこと　④フランス女性　⑤ジャック・ジョンソン　⑥合衆国北部全体　⑦南北戦争　⑧アブラハム・リンカン　⑨Ｕ・Ｓ・グラント　⑩シャーマン将軍　⑪カトリック教徒　⑫ローマ法王　⑬ユダヤ人　⑭共和党　⑮奴隷制度　⑯社会的平等　⑰共産主義　⑱社会主義　⑲合衆国憲法修正第13，14，15条

がそれである。ライトはこれらを要約して，タブーとされたものは「本気で知りたくなるトピック，或は黒人の男らしい自己主張」に関するものであると述べている。これは多分に遠慮勝ちないい方であって，上記の事項に目を通せば⑮の奴隷制度を筆頭に②のＫＫＫ団に象徴される白人の黒人に対する人間的不正行為が第一に話題禁止とされていることが分ろう。ＫＫＫ団は南部再建期のもの，1920年代のもの，1950～1960年代のものに分けられる。1920年代のＫＫＫ団は黒人のみを対象とせずユダヤ人，カトリック教徒であるアイルランド，イタリヤ系白人を襲っており⑪⑫⑬がタブーとされるのはこの関係である。

人種の差異にもとずく人間的不正が話題禁止とされるところでは人間の自由と平等の理念が話題禁止とされるのは当然である。③⑯⑰⑱⑲が口にされてはならないと云うのはこれを物語るものであって，人間の自由と平等に関する理念を想起させられることを恐れるのは黒人に対する白人の不正が白人にとって自らの精神的毒死の要素と化していることを明らかにしている。さらに，これらの話題禁止事項の初頭に掲げられたものが白人女であることは白色人種の異人種に対する不正が白色人種優越・黒色人種劣等主義を支柱としてなされていることを明確にしている。

白人女と黒人男の性関係，人間関係は人種主義が制度化されたものである人種隔離制及び人種主義そのものを破壊するのでタブーとされているのであ

るが，この件はアーノルド・ローズ Arnold Rose を指摘する如く，「白人男が黒人女と婚外交渉を積ねて来ている故に」[9] 一層白人女の人種的純潔が要求され，また白人男が黒人女に関係している以上，白人女も黒人男と関係することがあり得るため，これを防止する上で黒人男の白人女への接近を異常なまでに警戒し，防がねばならないのである。これに加えて白人間には人種扁見が生み出した黒人の性的欲望，セックス力に関する迷信的過大評価が存在し，黒人を潜在的強姦者と感ずる傾向が強い。人間平等の理念に連らなる，黒人の人権，市民権を保障した合衆国憲法修正第13，14，15条が話題禁止の最後に置かれ，白人女が第一に掲げられているのは理念的なものよりも具体的に白人女の身体という現実的なものが人種主義社会では遙かに重大な問題であることが分る。

①と⑲が一見掛け離れているかに見えるが実は人種主義的感情によって愈着しているのであってこの愈着が奇妙な効果をもって人種扁見を呼び起しもするのである。これは白人社会に広く流布している次の質問事項に現わされている。この質問は黒人の市民的平等を主張したり，差別に反対する人々に投げつけられるもので J・W・V・ザンデン James W. Vander Zanden が *American Minority Relations* (1961) で白人の黒人恐怖に関して検討した中で取り上げている。それは「お前は自分の姉妹（娘）に黒人と結婚してもらいたいか？」[10] と云うものである。これは白人女が結婚する気がなければ問題にならぬ質問であるが人種扁見のある者には当然，また人種扁見のない様に見える者にも激しい拒絶反応を生じさせるものなのである。フランツ・ファノン Frantz Fanon (1925—1961) はこれに類似した質問を検討したO・マノニの「植民地化の心理学」の一節を彼の「ニグロと精神病理学」で取り上げ，これに新しい解釈を加えている。

マノニは人種差別論者が「それじゃあなにか，年頃の娘がいたら，ニグロにくれてやれるかい？」と彼等と信念を共にしない者に対して切り出すと人種扁見を少しも持っていない様に見える者でもこれには狼狽して一切の批判

精神を失ってしまうのは近親相姦的感情を戟刺するからだ，と述べている。ここでファノンが注目するのはこの近親相姦的感情が白人の婿よりも黒人の婿を想定する時に顕在化することである。ファノンは白人の父親が無意識的に彼が所有していない性的世界に黒人が彼の娘を導いて行くことを幻想するからであると指摘し，これは植民地主義を正当化した人種主義が白人の感情領域に侵透し，黒人を生殖力盛んな野獣と決め込んでしまった扁見がセックス感情をゆがめてしまっているのだ，と述べている。[11]

白人女と黒人男の関係をタブーとするのは，従って，これが人種主義及びこの人種主義が制度化された生活形態への脅威となり，同時に人種主義に縛られたセックス感情に恐怖をもたらすためであると云える。白人女と合衆国憲法修正第13，14，15条がタブーの両翼とされたところに南部の人種主義の強さが明白にされ，そのカラクリも明らかにされているのである。この種の扁見は黒人の北部移民が高まるにつれて北部白人の間にも侵透してゆく。[12]

ライトが掲げた19の話題禁止事項のこの両翼のほぼ中間，要にあたるところに位するのが⑤のジャック・ジョンソンである。彼が南部連邦を敗北させ奴隷を解散した北部勢力の代表的人物，⑧のリンカン，⑨のグラント，⑩のシャーマンと肩を並べて禁句であるのは南部白人の被害者意識と敗北感を呼び起すためであろうが，彼はスポーツ界で王座につき黒人が社会的に平等であることを具体的に示したのみならず，白人女と関係を結んで人種主義を社会，セックスの両面で脅かした点でリンカン達をしのぎ⑤位にあるのである。当時，黒人運動の急進的指導者に有名なW・E・B・デュボイスW・E・Burghardt Dubois がいたが彼は全く南部白人の脅威とはならず，黒人ボクサー，ジョンソンが話題禁止とまでされたのを考えると，「白い希望」が如何に熾烈であり，如何に耐え難い屈辱でもあったかが分る。ライトが回想している時代はジョンソンが王座を去って10年後の頃である。ジョンソンが白人大衆感情に与えた打撃の大きさが推測されよう。

白いチャンピオン時代はジョンソンがタイトルを失った後20年余り，ボク

シング界の巧みな操作力にも助けられて存続する。再び「白い希望」が湧き上るのは1937年ジョー・ルイス Jae Louis がジミイブラドック Jimmy Braddock を倒して再び黒人チャンピオンが誕生した時である。この王座はエザード・チャールス，Ezzard Charles, ジャージイ・ウオルコット Jersey Walcott が次々に占めて黒人の手におさまり，1952年，ロッキー・マルシアノ Rocky Marciano（本名 Rocco Francis Marchegiano）がウォルコットを倒す日まで約15年続く。マルシアノは1956年引退するまでの僅か4ケ年を白人チャンピオンの時代とし，白人大衆の願望を満して英雄化され，無敗の王者として黒人ボクサーに対する対抗者的存在となる。そして三たび黒人チャンピオンの時代が来る。フロイド・パーターソン Floyed Patterson，ソニー・リストン Sonny Liston，ムハメッド・アリ Muhammad Ali（元名 Classius Clay）が王座を占めて世界ヘヴィー級ボクシングを黒人の独占物と化しめるが，ジャック・ジョンソンの出現によって誕生した「白い希望」はムハメット・アリの出現する時代まで，往年の熾烈さを失ってしまう。それはジョンソンとアリを除いて，これらの黒人チャンピオンの多くは所謂 Whiteman's Nigger の類型に身を置き，ひたすら白人社会のための観賞用競技者としてリング上で活動し，リング外では固く口を閉ざし，沈黙を守ったためである。彼等は白人の下位に置かれた黒人の位置を従順に守って，白人大衆感情に背くことは決してなかった。

注 (1) The "Great" White Hopes, 1908—1970 in *World Boxing* (July, 1970) p. 40.

(2) Pete Axthelm, The Return of an Exiled Champ in *Newsweek* (November 9, 1970) p. 58.

(3) James W. Vander Zanden, *American Minority Relations* (New York, The Ronald Press Company, 1963) pp. 193—194.

(4) *Report of the National Advisory Commission on Civil Disorders* (Bantam Book, 1968) p. 215.

(5) Louis E. Lomax, *The Negro Revolt* (Signet Book, 1963) p. 43.

(6) Ibid., p. 43.

(7) Richard Wright, *Black Boy* (Signet Book, 1951) p. 280.

(8) Ibid., p. 284.

(9) Arnold Rose, Race and Ethnic Relations in Robert K. Merton and Robert A. Nisbet, eds., *Contemporary Social Problems* (New York, Harcourt, Brace & World, Jnc., 1961)

(10) James W. Vander Zanden, op. cit., p. 161.

(11) フランツ・ファノン著，海老坂武，加藤晴久訳，黒い皮膚・白い仮面 六，「ニグロと精神病理学」みすず書房　106—107頁。

(12) John Hope Franklin, Introduction : Color and Race in the Modern World, in John Hope Franklin ed., *Color and Race*, (Boston, Houghton Mifflin Conpany, 1968) p. xiii.

II

ライトは南部のタブーに触れた *Black Boy* の同じ章（12章）で白人に強要されて行った賞金稼ぎのボクサー[1]に似た体験を述べている。彼がテネシイ州メンフイス市の眼鏡会社の工場で走り使いをしていた頃，オリンという白人職工長がライトとハリソンと云う黒人少年とをナイフを使わせて喧嘩させ，楽しまんとする。オリンが捏造した話によると，筋向いの建物に働いているハリソンがライトをナイフで狙っていると云う。そして，心配するな，俺が控えているから，と彼の側に立っているかの如く見せ掛けながら挑発する。ライトが敵意を見せているハリソンにこの件を問い正すと，彼はオリンの密告によるとライトが自分を狙っているので先制攻撃でライトを倒さんとさえしていることを告げる。二人は白人の張った罠の中にいることに気づくが，この罠からのがれることは出来ぬことも知っていた。オリンは白人親方の好意を拒むな，とライトを脅かしてナイフを手渡す。二人は緊張し殺気立ち互いに機を窮う羽目に落ち入ってしまう。

ここまで二人を追込んでおいて数日後，オリンは一国の白人をつれてやって来る。ナイフ喧嘩がいやなら，グローブをはめて決着をつけてはどうか，

と云うのである。ハリソンはすでに四回戦五ドルの勝負に同意している。

或る土曜日の午后，二人は白人観衆が熱狂する中に，或る建物の地下堂で汗を流し，血を流し，涙を流して激しく殴り合うことになる。

五ドルを手に腫れあがった顔を押さえて家路についた嘆きをライトはここに書き加えている。

黒人チャンピオン達は職業人であってライトが体験したボクシングを行っているのではないが，エルドリッヂ・クリーヴァー Eldridge Cleaver も指摘する如く，「白人の権力構造の操り人形」である面は拒否出来ない。常に対戦の仕立屋オリンの如き人物が糸を引き耳うちするのである。そして一団となってやってくる白人観衆がいるのである。彼等に対しては戦いを挑めないのである。「白いアメリカが黒いチャンピオンに要求するものは輝かしい，強力な肉体と鈍い，家畜の様な心である。つまり，リングに於ては虎でありリングの外では飼い猫であることである。」これがジョンソンとアリを除いた歴代の黒人チャンピオンの白人社会の期待に応じた姿であった。子供の頃のハリソンとライトに似た境遇にあったと云える。「白い希望」がさして強くはなくなったのは白人の下僕的黒人チャンピオンが産出されていたためである。

ところが1960年の中盤に入って「白い希望」は時代の風潮と共に高まって来るのである。黒い力の抬頭はアメリカのボクシング界に予想もされなかった黒い回教徒，ムハメッド・アリが踏み込んで来たのである。

1960年，18才であったキャシアイ・クレイはオリンピック大会でライトヘヴィー級に優勝し，アメリカに金メダルをもたらした。故郷に帰って来たクレイはケンタッキー州はルイスヴィル市の或るレストランに，この金メダルを首にかけて入った。そして彼は黒人であることを理由にこのレストランを追い払われる。オリンピック大会での功績など肌の色が黒ければ問題ではないのである。ジェイムス・ボールドウインもほぼ同じ年令であった頃，ニュージャージー州トレントン市の或るレストランから追い払われたが，この時

の激怒を *Notes of a Native Son* (1955) に表現している。[4] 一方はボクサー，他方は作家としてアメリカの人間差別に対決することになるが，クレイは1961年，ブラック・モズリムに入信し，名をムハメッド・アリと改めて白いアメリカに挑戦することになる。1961年は所謂「人種統合」の気配が強かった時期でもあった。白人の良心に期待をかけて，南部では非暴力抵抗運動が展り開げられていた。アリの所属したブラック・モズリムは人種主義に汚染された白人の良心なるものを信用しない。「若し，白人が本当に公正であろうと望んでいたとするなら，とブラック・モズリムは主張する，白人は過去300年の間にいつでもそうあり得た筈である。この世のゆるぎない支配者であった頃には，白人は決して人種統合など口にはしなかった。己れの帝国が砕けかかっているのに気づいた今になって，犬がもう一度昔を忘れ，彼の主人を助けんと飛び出して来てくれるのを希望して，白人は彼の忠実であった犬に，彼の所有している最とも乾らびた骨を投げ与えようとしているのだ。[5]」彼は「人種統合」という「ひからびた骨」に走り寄り，冷酷であった昔の主人のことを忘れ，彼の忠実な下僕となっているリストンを倒し，挑戦して来る「白い希望」の従者，パーターソンを叩きのめした。彼はリストンの再挑戦を一発のパンチでつぶしたが，パーターソンを仕留めるのに12ラウンドを要したと罵倒されたが，*Newsweek* のスポーツ編集人，ピート・アクセルム Pete Axthelm は，これは「パーターソンの試合前の反ブラック・モズリムの言動を怒り，アリは彼を12ラウンドまで充分に，手厳しく罰したのであった。[6]」と書いている。

アリはジャック・ジョンソンとは完く異質な面で白人社会を激怒させた。それは彼が反キリスト教・反白人主義集団，ブラック・モズリムの忠実な信奉者となって白人社会に反逆し，ボクシング界にあっては歴代黒人チャンピオンの典型，白人観賞用競技者である「黒い種馬」 black stud の鋳型を破壊したからである。[7] そればかりではなく，1960年の中盤以後，増々その力を黒人運動の中に広げ始めて，白人社会を脅えさせている黒人革命派の中から

も彼の黒人チャンピオンとしての社会的意義を強調する声が出て来たのである。「ムハメッド・アリは白いアメリカと対決した最初の『自由を手にした』黒人チャンピオンである。ボクシング界での本当の革命家，つまりボクシング界の黒いフィデル・カストロである。」[6] とクリーヴァーは云い，アリが白人社会を激怒させ脅やかした要因を次の如く判断している。「本質的には，ムハメッド・アリ以前の黒人チャンピオンは皆んな自分の私生活を，社会的イメーヂに反せぬ様，白人によって操作されていた操り人形であった。彼の役割は自分が吊り下げられている糸を隠し，大衆の前であたかも自主的に自ら欲するままに活動しているかの如く見せかけることであった。だが，ムハメッド・アリの出現によって人形使いは最早操り人形にはとどいていない一握りの糸を手に握ったまま放置されることになったのである。どの黒人よりも優越していると感じている白人達に取っては，それは自己のもつイメーヂに対する深刻な打撃であったのである。」[9]

この上，彼はヴェトナム侵略戦争に殺気立ち，不正行為に神経過敏になっているアメリカ社会に更に強力なボディブローを喰せた。「俺はヴェトコンと喧嘩することなんか何もない。」[10] 1966年彼は徴兵拒否を宣言したのである。

1967年6月，ゾラ・フォーリイ Zora Folley を倒して九回目のタイトルを防衛した三ケ月後，彼は徴兵拒否のかどで徴役5年，罰金1万ドルの刑をかせられた。そしてこの機会を待ち構えていたボクシング協会は彼から世界ヘヴィー級チャンピオンのタイトルを剝奪した。これは「黒い種馬」の伝統を潰し，白人観賞用競技者の鋳型を壊し，自主自律の黒人として行動した黒い力の具現者に対する白人権力社会の報復であった。それはリング内で処置出来ぬ全く新しい形の「白い希望」の表明でもある。ジャック・ジョンソンに対する「白い希望」は白人優越意識が損壊されるのに耐え難いという人種主義社会の感情障害の現われであったが，ムハメッド・アリに対するものは一方では民主主義とキリスト教の理念を口にし他方では人種主義者行為と海外侵略を行う白人社会の精神錯乱と人間不正への報復を予感する恐怖を現わ

すものである。これが白人社会の矛盾の現われであることは彼に有罪判決を下しタイトルを剝奪することによって明白となった。彼の行動と彼に対する社会的，政治的，圧迫は悩めるアメリカの若い世代に強い共感を呼び起し，彼は白人，黒人両大学のキャンパス集会に頻ぱんに招かれ演説し，社会的反逆の黒いシンボルの一つとなる[11]のである。

こうした社会的趨勢を前に白人大衆感情は何を願っていたのであろうか。もはやアリを叩きのめす白人ボクサーが期待出来ぬ現実にあって，願いは夢想と化す外はない。往年の白い力，ロッキー・マルシアノを今日あらしめれば，と云う時代錯誤で非現実的な，アリ打倒願望を抱く大衆感情を確認した興行界は，コンピューター編集によるマルシアノとアリの対戦フイルムを作製し，1970年1月，全米の映画館，TVを通して放映することになる。この仮空の対戦録画を聴視した者はイギリス，メキシコ，オーストラリヤを含めて1,500万に及ぶ，と *Newsweek*[12] は伝えている。対戦結果は明白であってアリはマルシアノに叩きのめされることになっていた。

政治，社会，スポーツ，興行とあらゆる面での執拗なムハメッド・アリ追放の願いはアメリカ社会の人種主義感情の執拗さを露わにすると共に，この白人優越主義なるものが何者かによって脅かされつつあることを示している。1960年代は政治，経済，芸術，文学，宗教，ファッション，スポーツと至る所でブラック・パワーが地面を割って，雨後の筍の如く立ち現われ，白人優越主義，白人の温情主義をはねのけ黒人共同体意識を強めて，白人社会に対決する気運が高まり出した年である。人種扁見と差別を温存させる白人社会がこの力を前に脅えているのである。これは法律を強化し，治安維持を強める Law and Order の風潮をも広げ，典型的な例ではこれがブラック・パンサー狩りとなって現われてもいる。ウイリアム・スタイロン William Styron (1925—　) の「ナット・ターナーの告白」*The Confessions of Nat Turner* (1967) はこの60年代の終り頃に世に出た人種問題に関する政治的・社会的意味の極めて強い作品であり，これは黒人チャンピオン，ムハメッド・アリ

を様々な手段を講じて屈服させんと欲する白人大衆感情と権力社会の試みと同じく，文学の分野で歴史的小説と作家の想像力の自由な行使と云う名のもとに，黒人の英雄，1831年のヴアージニヤ州サーザンプトン奴隷反乱の指導者であるナット・ターナーを白人女の前に屈服させ，白人の精神的，感情的性的隷属者として白人社会の藻屑と化さんとするものなのである。人種の差異とイデオロギーの相異を基に行われる人間差別が文学とボクシングの分野に隔てなく姿を現わしているのである。

注 (1) Richard Wright, op. cit., pp. 155—266.

(2) Eldrige Cleaver, *Soul on Ice*, (New York, McGraw-Hill Book Company, 1968) p. 87.

(3) Eldridge Cleaver, op. cit., p. 87.

(4) James Baldwin, *Notes of a Native Son*, (Bantam Book, 1964) p. 77.

(5) Philip Mason, The Revolt Against Western Value in John Hope Franklin ed., *Color and Race* (Boston, Houghton Mifflin Company, 1968) p. 57.

(6) Pete Axthelm, op. cit., p. 59.

(7) Ibid., p. 58.

(8) Eldridge Cleaver, p. 92.

(9) Ibid., p. 93.

(10) Pete Axthelm, p. 59.

(11) Ibid, p. 57.

(12) *Newsweek* (Febuary 2, 1970) p. 30.

III

W・スタイロンの「ナット・ターナーの告白」には白人社会に広く流布している白人優越主義を内包する文化同化説とこの同化説が白人優越主義を含むこと自体によって醸し出される白人の恐怖感が存在する。スタイロンが老獪であるのはこの心理面に於ける恐怖感を提出しながらも更に一段と深い恐怖感，黒人の反逆，革命的決起を予想する社会的恐怖感なるものを鎮めんとしている点である。しかし，心理面での恐怖を提出し，社会面での恐怖をも

全く被い隠すことの出来ない点で白人優越主義をもとにする白人文化への同化論的発想がすでに白人の文化的棍棒ではなくなり，むしろ自らを脅かす亡霊と化していることを示している。W・スタイロンの願いはこの亡霊が黒人にも乗り移ることによって彼が想像力の中でナット・ターナーをそうさせた如く，黒人を骨抜きにしてくれること以外にあるまい。黒い力はスタイロンに悪名高い偽歴史小説を書かせるほどに強力なものとなり育っていると云ってよかろう。この小説と黒人文学との関係，作品検討は後に廻して，先ず文化的同化の問題から検討してみよう。

スタイロン流の文化同化論的考えは黒人が異常にセックス力が強いという神話めいた扁見と同じほどアメリカに広く流布している。これはアメリカが様々な文化的，民族的背景から成る移民が旧移民の文化的母体とされるアングロ・サクソン文化を中核とするアメリカ文化の主流に流れ込み，同化して出来た国であるため，体験的に納得され易いためでもあろう。

スタイロンの小説に於ての同化論はロバート・E・パーク流のもの[1]で，これに白人文化に同化した黒人男と白人女のセックス関係を盛り込んで興味深く，一般読者に異様にアッピールするよう仕立てられている。彼が依存している素朴にして通俗的な同化論は次の如く要約出来る。

黒人が白人文化に同化されて行くと白人社会の価値観，生活規範，生活様式，美的判断等を身につけることとなる。従って白人社会の所有する力，美社会的地位，人間を志向の対象とし，これを求める様になる。これは人間関係に於ては，黒人よりも白人との交わりを好み，自らのグループのものとの交わりに対して否定的態度をとる様になり勝ちである。この傾向は白人と黒人の関係が多数派と少数派，支配と被支配の関係にある時は特に強く，理論的には社会，経済，政治，技術面で力の強い人種グループにそうでない人種グループが吸収されることによって完成する。

W・スタイロンはこの同化論でナット・ターナーを取扱うのであるが，そこで彼はアメリカ白人の人種主義者の正体を暴露している。

この文化同化の過程で人種主義者が要求し期待するのは黒人が白人文化を身につけることによって，自らの黒さを否定的に評価し，人種的に自らを白人に劣るものと判断し，白人の下に自らを地位づけることである。そして，人種主義者が恐れるのは白人文化に同化した黒人が白人と人間関係を結び，肉体的に融合することである。白いアメリカが黒人をアメリカ文化に同化させながら，人種の差異をもとにこれを差別するのはこのためである。ところが人種主義の恐怖は人種差別，黒人に対する社会，経済，政治的抑圧によっては安静を保っことは出来ない。この人種主義的抑圧そのものが黒人の自覚と怒りを呼び起す張本人となるからである。人種主義者は自らの人種主義によって心理的恐怖と社会的恐怖，つまり内面の恐怖と外部の恐怖に晒されているのである。

W・スタイロンはこの二つの人種主義者の恐怖を鎮め，アメリカ物質主義的繁栄生活の根底にくすぶる人種問題と云う危険物を想像の領域で中和させ，処理しようとしている。彼はターナーを先ずネル夫人，ルイザ嬢，エンマリン嬢等白人女性の多い白人家庭に置いてこの世界に同化させ，心身共にこれらの女性に隷属させている。そして，この白人女の問題から彼の後年の奴隷反乱の動機付けを行うのである。まさに一石二鳥の狙いである。

ナット・ターナーは1800年10月２日，ヴァージニア州サザンプトン郡にベンジャミン・ターナーの所有する奴隷の子として生れた。これは1831年の反乱後捕えられ拘置された時，lawyer，トーマス・グレイ，Thomas Gray が取った「ナット・ターナーの自供書」*The Confesions of Nat Turner, the leader of the Late insurrection in Southampton, Va.*,（1831）から知り得るもので，奴隷であった彼の生い立ちはそれに関して僅かに語られているこの自供書以外には知る手がかりは殆んどない。[2] 彼は名もない奴隷であり，31年の生涯を通して奴隷の身であったためである。W・スタイロンは資料の殆んどないこのターナーの生い立ち，青少年期についての処置に関して，その作品に付した覚書に次の如く巧みに断っている。

「ナットに関して殆んど知られていない分野，つまり彼の生涯の初めの時期と反乱の動機に関しては……人生の出来事を構成する上で想像力を最大限に働かせた……」

これが既に問題なのである。W・スタイロンの小説ではナット・ターナーがサミュエル・ターナー家の家庭でペットの様に可愛がられ，ネル夫人に宗教的感化をうけ，ルイザ嬢に読み書きを習うことになっているが「自供書」によればナットは同じく奴隷であった祖母の宗教的感化を受け，奴隷であった父母に読み書きを学んだことが明らかにされている。ナットは賢明な子供であったらしく，だからこそ奴隷反乱を指導する人物に育ったのであるが，幼い頃，泣きしゃぐって両親を困らせた時，親はこれを静めるべく一冊の書物を投げ与えている。この時，彼は文字に興味を示し読解力を現わして親を驚かせている。スタイロンはこの事実を軽んじて，ナットを黒人家族から奪い取り，白人家庭に入れて育て上げている。人間形成上，致命的な時期をそうしている点に注目しなければならない。こうしてナットは白人家庭で白人女の感化を充分にうけ，白人女から精神的，感情的離乳の出来ぬ若者になる様仕立てられてしまっている。こうしておけば後はW・スタイロンのペースである。ナットは成長し，性に目覚める年頃が来る。彼の周囲には彼が憧憬の念を懐き，慕い求める白人女の甘美な声，体臭，肢体がとりまいているのだ。

スタイロンはここで用心深くまた巧妙である。彼はナットにネル夫人の手を通して白人の聖書を与え，ナットの性欲が現実的に白人女によっては満足させられぬ様に宗教的ブレーキをかけているのである。そればかりでなくナットの祖母が与えた彼への宗教的感化を除去し，またナットが奴隷制を悪と感じ，奴隷の束縛を神によって授けられた試練と感じて，旧約の予言者の如き使命感を持つに至った，聖書の彼に対する働きを消さんとしているのである。

ナットはネル夫人の白い指が触れた皮革表紙の聖書に陶酔し，将来説教師として身を立てんとする決意を増々深めることになっている。聖書で黒人男を飼育したものに ハリエット・B・ストウ，Harriet・B・Stowe (1811—1896)

の「アンクル・トムの小屋」 *Uncle Tom's Cabin* (1852) が有名である。アンクル・トムの膝の中に主人の令嬢エヴァンジェリンが坐っていても全く心配のない男にしてある。またジェイム・ボールドウィンも指摘[3]する如く，アンクル・トムは最初から中性であってセックスがなく白人女に対して100％無害でもある。これに比べるとW・スタイロン製のナットは異常なほど性欲が強く，周囲の白人女に敏感に反応を起すのである。現実的にセックス行為に圧力が加えられている彼は想像の世界で白い女の肉体を玩び，事の処理に耽けり，幻想から覚めては貴高い女を犯す妄想に責められて宗教的修行にはげむ，と云うわけである。ナット・ターナーはアメリカ黒人が誇る人物である。ジェイムス・ボールドウィンの小説 *Another County* (1962) に登場する白人女の肢体の虜になった作中の人物，ルーフアス・スコットではない。アメリカ白人が誇る人物，ジョーヂ・ワシントン George Washington をこの種の色情狂に仕立て彼が Masturbation を行っている場面を描いたらアメリカ人達が無関心に放置しておくかどうか疑問である[4]，とマーカス・カンリフェ Marcus Cunliffe は「黒い文化と白いアメリカ」*Black Culture & White America* (1970) でナットに対する侮辱的描写を批判している。ナット・ターナーに対する侮辱はさて置き，例え想像の世界という安全圏内に於てにせよ，白人感情を苛立せ，憎悪させる白人女と黒人男の性関係，特に白人女がナットに手荒く，思うままに犯される場面をスタイロンが描いて見せるのは何を意味するのであろうか。ここにはセックス感情にまで根を拡げた人種主義と白人の黒人コンプレックスが存在するのである。　（続く）

注 (1) See Robert E. Park, *Race and Culture* (New York, The Free Press of Glenoe, 1949).

(2) See Robert Aptheker, *Nat Turner's Slave Rebellon* (Evergreen Black Cat Book, 1968)

(3) James Baldwin, Many Thousands Gone in *Notes of a Native Son* (Bantam Book, 1963) p. 21.

(4) Marcus Cunliffe, Black Culture & White America in *Encounter* (January, 1970) p. 30.